



過去と未来の間

教育学部 教育学科教授

山田 綾

IBUの学園訓「誠実を旨とせよ」から思い浮かべるものの一つに、ルイ・アラゴンの「ストラスブル大学の歌」の一節があります。

教えるとは、未来を語ること

学ぶとは、誠実を胸に刻むこと

1943年11月に、ナチスの戦火を逃れてフランス中部に疎開し教育を続けていたストラスブル大学で、教授・学生がナチスに銃殺され、数百名の学生が逮捕されます。その時に詠まれたのが、この詩です。

同じ時代を生き抜いたハンナ・アレント（哲学者）も、<教え>と<学び>の視点を提起しています。ユダヤ人として迫害を受け、戦後アメリカに亡命し活躍したアレン

トは、ユダヤ人大量殺戮という20世紀最大の悪が、実は「凡庸さ」、つまり「ただ自らの職務にのみ専心し、その意味を深く考えず、大量虐殺に荷担してしまったこと」により生じたかと思ひ至ります。執行の最高責任者アイヒマンの裁判（1961年）を傍聴したアレントは、「アイヒマンが「私は国が決めた『最終的解決つまりユダヤ人の絶滅』という政策と命令に従い、任務を果たしただけ」と繰り返すのを見て、彼が極悪非道な罪人ではなく、「思考の欠如した」人にすぎないことに驚きます。現代的な「悪」は、根源的ではなく表層的だからこそはびこり世界を廃墟にしてしまう。アレントは、表層の悪に立ち向かう可能性を「一人ひとりが思考する」「ものごとの表面に心を奪われず、目の前の人に向き合い、立ち止まり、自分で考え始める」ことに見出します。そして、全体主義の克服には、全ての人が異質な他者を排除することなく議論し自由に活動できる世の中が必要であるとして、多様な人々＝複数性を基にした「公共性」を<教え>の視点として考えました。

時代状況の中で言葉の意味は、再構築されていきます。みなさんと一緒に学園訓「誠実を旨とせよ」の意味を確かめ、創り出していくことができればと思います。



「人と笑う」 —共感・共生ということ

人文社会学部 日本学科教授
仏教文化研究所研究員

南谷 美保

実は、私は、古典落語が大好きなのです。米朝師匠のCDを聞いては「ブッフ」と噴き出し、古典落語全集などを紐解いては「むふふ・・・」と笑いながら、こうした古典落語の「おかしさ」とは何なのだろうと考えたとき、ふと思いついたのが、「人と笑う」という言葉です。

古典落語の笑いの背景には、「まあ、こいつにもそれなりにいいところもあるし、いろいろな人が混ざり合っている世の中は回っているのだからお互い様か」という気持ちとか、空気のようなものがあると思います。この「お互いを認め合う」、つまり、共感や共生という意識が基盤となって、相手の価値をそれなりに認めたいという「笑い」、そうした空気が醸し出す「おかしさ」が古典落語の魅力なのでしょう。

「人と笑う」と「人を笑う」は、一字違いですが、共感や共生を基盤とする「人と笑う」のとは異なり、「人を

笑う」には、相手を認めず、相手と自分を切り離し、さらに相手を遠くへ突き放すという大きな違いがあるように思います。そして、昨今の私たちの日々の暮らしの中では、「人と笑う」よりも、「人を笑う」ことの方が多くなっていないでしょうか。

仏教には、「無財の七施」という言葉があります。「無財」ですから、お金でも物でもなく、思いやりのまなざし、ことば、態度によって周りの人々に喜びを与えることをいいます。その一つに「和顔施」、相手にその人を思いやりの微笑を向けることも含まれています。

そういえば、各地の伝統的な神事には、そこで祀られる神の前でわざと面白おかしい行為をして、神に笑っていただくために行うものがあります。神の前では、人はみな等しく「アホなことをするどうしようもないヤツら」で、だからこそ、その土地の神に守っていただける存在になるのです。

聖徳太子も「共に是れ凡夫のみ」と言われていますね。だから、本来ならば「人と笑う」ことはできても、「人を笑う」ことは誰にもできないはずなのです。人は皆それぞれ違う存在なのだし、違っているのはお互い様なのだからという気持ちをもって相手を認め、いつもにっこり、「人と笑う」ことを心掛けると（難しいですが・・・）、あなたの周りから世界が変わって行くかもしれませんよ。

❖ 学園訓「誠実を旨とせよ」について

人文社会学部 人間福祉学科教授
仏教文化研究所研究員
上 續 宏道



四天王寺学園には聖徳太子のお言葉を元にした五項目からなる学園訓があります。

今回はその第三にあります「誠実を旨とせよ」ということについて考えてみたいと思います。

まず、誠実の「誠」は「まこと、いつわりでないこと、まごごろ」、「実」は「中身が詰まってしっかりしている、まこと、真なるもの、まごころ」（鎌田正・米山寅太郎『新漢和林』大修館書店、2011）といった意味があり、「誠実」という言葉は歴史的には色々な使われ方をしたようですが、現在では「真心があっていつわりがなくまじめなこと、ほんとうに、まことに」（鎌田・米山『同上書』、大修館書店、2011）といった意味で一般的に使われているようです。

この学園訓「誠実を旨とせよ」の拠り所は約千四百年も前に仏教をはじめ儒教・道教・法家など、当時のあらゆる思想のうちの非常にすぐれたものを集めて聖徳太子により制定された「十七条憲法」ということになります。そのいくつかの条文に拠り所と考えられる内容が見られますが、今回は特に第六条と第九条を取り上げたいと思います。

第六条には「悪を懲らし善を勧むるは、古の良典なり。是を以て人の善を匿すこと無く、悪を見ては必ず匡せ。其れ諂い詐る者は、則ち国家を覆す利器為り。人民を絶つ鋒剣為り。亦佞り媚ぶる者は、上に対しては、則ち好んで下の過を説き、下に逢いては、則ち上の失を誹謗る。其れ此の如き人は、皆君に忠なること無く、民に仁なること無し。是れ大なる乱の本なり。」とあります。

これは、「悪を懲らし善を勧めるのは、昔からの良いしきたりである。したがって、他人の成した善は世に明らかにし、悪を見れば止めさせなさい。へつらったり、偽ったりする者は、国を損ねる鋭利な武器であり、人を傷つける鋭い刃の剣である。また、おもねり媚ぶる者は、上の人に対して目下の人々の

過失を告げ口し、部下の人々に出会うと上司の失敗を非難しけなすのである。このような人は、主君に対して忠誠心は無く、人民からも人徳が得られない。これは世の中が大いに乱れる根本なのである。」と訳すことができます。第六条中の「忠」という言葉は大切に、「他者への真心」を示しており、第六条は我々が社会生活を営む上での具体的な正しいあり方について教えて下さっているわけです。

仏教は、正しいあり方、生活を目指す教えですが、これは、第六条にある何ごとにも真心を込めて正しく生きることを実践するようという教えにも通じると思います。

一方、第九条には、「信は是れ義の本なり。事毎に信有れ。其れ善悪成敗は、要ず信に在り。羣臣共に信あらば、何事か成らざらん。羣臣信無くば、万事悉く敗れん。」とあります。

これは「真心はものごとが道理にかなう根本である。何事をなすにも真心をもってしなさい。事の善悪、正否、すべて真心があるかどうかにかかっている。真心をもってすればどんなことでも成功し、真心がなければ何事も失敗するものである。」と訳すことができます。「信は是れ義の本なり」も、「論語」にみられる思想ですが、「信」という言葉は「まこと、真心」、「義」は「人の道、道理」ということになります。

仏教でもこの「まこと」ということを大切にしていますが、聖徳太子も全てのことに「まこと」がなくてはならない、善を為すには信がないといけない、悪事は信を欠いたことによるとされています。

ちなみに、仏教では、ほしいままに悪事をする心の働きを「放逸」といって、よくない心の働き、今でいえば、「ふまじめ」、善いことはせず、ほしいままに、しまりなく暮らしていく心の働きを意味します。

一方で、誠実さ、誠意のあること、まじめさに相当する徳目として不放逸という心の働きが教えられています。

傲慢にならず、誠実と公平に歩むべきことがこの第九条にも示されているわけです。

このように学園訓である「誠実を旨とせよ」のお言葉は、この十七条憲法の非常に大切な中身が集約された徳目のひとつということになります。放逸になることなく、「真心で責任をもって、やるべきことはやる、してはならないことはやらない」という心がけで毎日の生活に励もうという仏教の教えにも通じるわけです。

ウパーヤ学生編集員を募集しています

仏教教育広報誌「ウパーヤ」の紙面作りに参加していただける学生編集員を募集しています。仏教、寺院、仏像、巡礼、歴史、日本文化などに興味のある方、また取材や記事の執筆に関心のある方ならどなたでも歓迎します。当然、学科専攻も問いません。

これまで第4面の「聖徳太子のゆかりの地をめぐる」の取材の執筆、およびその取材見学の様子をホームページで紹介するなどの活動をしてきました。また、本学が仏教教育の一環として実施している野中寺での座禅会に参加し、その実施状況をレポートしていただいた



こともあります。

興味のある方、詳しい話を聞きたいという方は、第4面下に記載されているメールアドレスにメールを寄せていただくか、仏教文化研究所の研究員にお声を掛けてください。

ご連絡お待ちしております。

(奥羽充規)

第14回 卒業生インタビュー



話し手：鈴木 正明(すずき まさあき) 昭和60年3月 文学部教育学科卒業
四天王寺大学 事務局総務課課長

本欄編集：坂本 光徳(仏教I・II講師・人文社会学部人間福祉学科健康福祉専攻専任講師)
(11月15日 仏教IIにおける講話「IBU 気質 IBU プライド」をもとに一部加筆、再構成をしております。)

卒業後の仕事について

教員免許は取得しましたが、卒業後はコンピュータ会社に就職その後、大学に戻り現在は大学事務局の総務課に勤務、及びソフトボール部の顧問と監督を務めています。総務課の仕事は、教授会の運営、学則等の規程の整備、入学式や学位授与式のサポートなど多岐にわたります。最近では東京オリンピックの学生ボランティアが泊まるホテルとの交渉にも行ってきました。

小学校教諭をめざしていましたが、卒業当時は「熱中時代」というドラマの影響と、採用人数が少なかったため、教員採用試験はとても厳しく夢は叶いませんでした。途方にくれていた私が、その業界に決めたのは親父の「これからはコンピュータの時代や!」という一言からです。

両親は学歴で苦労したので、我が子にはせめて人並みの学歴をと身を粉にして働いてくれたのを覚えています。それに応えるためにも、この業界で頑張ろうと決めました。親父は口よりも先に手が出るタイプで、臆も厳しい人でしたが、進学や就職などの人生の岐路では必ず背中を押してくれました。

就職したコンピュータ会社は大手企業で、就職時も同期は大阪で500人程いました。入社前の合宿研修は当時流行っていた大変厳しい内容で4泊5日の間、世間とは完全に隔離され、社会の厳しさの一端を知り、ビジネスマナーや社会の仕組みを勉強しました。課題が達成できなかったりルール違反を犯すと、腕立て伏せや腹筋を30回課せられたり睡眠時間が無かったりなどと厳しいペナルティーがあり、最終日には100人中60人しか残らないほどでした。

プログラマー・SEを目指していたのですが、入社後は常務の秘書的な仕事をしていました。社内には学閥による厳しい上下関係があり、配属された部署は学閥上位の者が多数を占めていました。そのため、私の配属を快く思わない部長から何かと理不尽に厳しい指導があったのですが、ある時それがピタッと止まりました。ある取締役が謀めてくれたのです。実はその人の奥様が四天王寺女子大学の出身だったのです。お陰様でその後も非常にお世話になりました。共学化して男子の一期生だったため、他の大学出身の同期には先輩がいることが羨ましかったのですが、その時初めてIBUの縦のつながりのありがたさを感じました。

その後電力関係の企業に派遣されて、電気料金のシステム構築に取りくみました。昭和61年頃は1年間で1ドル250円から160円ぐらいになる円高で、国会でも電気料金の値下げが議論されるほどでした。そのため何万本もあるプログラムをわずか2か月で変更することになりました。その2か月は休みもなく、残業時間は200時間を超え、会社で寝泊まりするような状況でした。大量のプログラムをあまりに短期間で変更したことで取材を受け新聞にも掲載されました。大変厳しい会社でしたが、内容の濃い時間を過ごしました。これらを乗り越えられたのは、学生時代に蓄えたもののおかげだと思います。

大学生活について

当時は男子が小学校の教員になるための大学は、通える範囲では他に2校しかなく新たに共学化したIBUは滑り止めだったのといわば本意入学でした。高校が自由な校風だったため、いざ入学すると驚くことばかりでした。制服があったり、男子が少なく2,000人中60人程度。男子トイレも少ない、居場所がない。グラウンドも狭いと逆境ばかりのため、快適に過ごすにはどうすれば良いかと考える日々でした。硬式野球部の創部を申請するも認められず、それならば女子もできるソフトボールならと申請したところ同好会を作ることができました。大学祭では女子ばかりの委員会初めての男子委員となりました。3、4年生の先輩方は男子に嫌悪感があり、非常につらいあたりでしたが、それでも食らいつき大学祭の企画の仕方や組織づくり、根回しの仕方、他大学との情報交換他、様々なことを教わりました。

1年はあっという間に過ぎ、2年生はまた忙しい日々でした。ソフトボール部はクラブに昇格し、夏にはオックスフォード留学、大学祭運営委員長にも任命され、地元では青年団の団長と何かなにやらの1年でした。委員長としての大学祭は委員とは全く違う景色で、徹夜の作業をするくらいのもり込みました。毎日毎日、本当に遅くまで皆で話し合い作業しました。その中で夜遅くに帰りのバス停で学生が暴走族に襲われるなどのトラブルも幾らもあり、体を張ることや警察の方との対応の仕方も学びました。

後輩へのメッセージ

社会に出ると先輩や上司から多くの貴重な教えがありますが、大切なことは自分がそれをどう理解して、どのように実行していくのかになります。そして何より、そのような教示をいただけるような人間関係を構築することが本当に大事になります。

学園訓には四恩に報いよとあります。四恩とは国の恩、父母の恩、世間の恩、仏の恩であり、私も振り返ると様々な人に支えられてきました。そして自分が身につけたことを社会に活かすことが四恩に報いることと考えます。

IBUにはたくさんの活躍している卒業生がいます。小学校の校長、幼稚園の園長、オリンピックのメダリスト、海外を拠点とするダンサーなど他にも様々あります。今でも卒業生同志で交流し、お互いをリスペクトしあい、切磋琢磨しています。皆がこのIBUで学んだことに誇りを持ち、社会に生かしています。

IBUの4年間は楽しいことばかりではありませんでしたが、過ごした時間は何一つ無駄なことはありません。それらは厳しい社会を生き抜いていく原動力になっています。それは私だけではなく、ここで学んだ皆の心や体にしみこんでいます。それがIBU気質です。そして母校を誇るそれがIBUプライドです。

学んでいる皆さんも先輩に負けないう、IBUの魅力を最大限に感じてキャンパスライフを謳歌してください。そしてそれを自分たちの原動力にしてください。私たち卒業生は、在学生の活躍を非常に楽しみにしているとともに、皆さんの目標になるように頑張っています。

平成30年度 冬学期「仏教II」講話題目

- | | | | |
|--------|--|--------|--|
| 9月20日 | 岩尾 洋学長「写経の効果」
藤谷 厚生先生「ウバーヤについて」
杉中 康平先生「オリエンテーション」
石谷智也、福本真帆「ピアサポートセンターのお知らせ」 | 11月22日 | 桃尾 幸順先生「断悪修善—聖徳太子が示された生き方—」 |
| 9月27日 | 福光 由布先生「写経の仕方・作法」 | 11月29日 | 中田 貴真先生、青名麻梨亜、滝口嵐土、前畑尚希「お寺参りのすすめ—聖徳太子霊場と四国霊場を巡って—」 |
| 10月4日 | 坂本 光徳先生「写経について」
小川和樹、吉村知泰「大学祭について」 | 12月6日 | 福本真帆、守屋凱夢、中筋一克「過ごしやすい環境づくりのために私たちができること」 |
| 10月11日 | 源 健一郎先生「学園訓「ピアサポートセンター」について考える」
吉村知泰、明和宏奈「オリンピックボランティアについて」
竹内杏弥乃、明和宏奈「大学祭について」 | 12月13日 | 1位 教健・佐藤ゼミ(王子谷一恵、京極彩香、甲斐万由子)「ゼミコンテスト発表」
2位 国際・奥羽ゼミ(青名麻梨亜、滝口嵐土、前畑尚希)「ゼミコンテスト発表」 |
| 10月18日 | 南谷 美保先生「写経と『経供養』」 | 12月20日 | 春名 麻季先生「2018年のふりかえりと現在の世界について」 |
| 10月25日 | 竹下寛、土屋美珠帆、益田大地、芝哲生、多田早也香「海外体験について」
井原隆聖、河村詩菜、西岡海渡、早川茜「オレンジリボン運動について」 | 1月10日 | 【仏教文化研究所研究員】矢羽野 隆男先生、【浙江工商大学からの交換留学生】鄒逸馨(浙江工商大学大学院生)、黄于鑫(同大学生)「留学生の体験したIBU・日本」
田中千悠、志磨妃佳「ピアサポーターについて」 |
| 11月8日 | 島田 和幸先生「利他の心と仏様の指」 | 1月17日 | 杉中 康平先生「まとめ」 |
| 11月15日 | 鈴木 正明総務課長「IBU 気質 IBU プライド」 | | |

聖徳太子ゆかりの地をめぐる

一 広隆寺（京都府京都市右京区） 一

紅葉の美しい11月、私たち取材班は、数ある京都のお寺の中でも聖徳太子に最もゆかりの深い太秦の広隆寺を訪れました。このお寺は太秦寺、蜂岡寺、秦公寺などの別称がある、京都最古の真言系の寺院です。ご本尊は聖徳太子像で、私たち四天王寺大学の学生にとってご縁を感じられるお寺です。この太子像は秘仏として年に一度11月22日しか一般公開されないため、惜しくも拝顔できませんでした。しかし、境内の美しさと、何度も焼失と再建を繰り返しながら歴史を育んできた力強さ、そして何よりも様々な仏像にメンバー全員が深い感動を覚えました。

境内の新霊宝殿には各時代を代表する仏像が数多く安置されており、その一体一体から感じられる厳かな雰囲気、心が静かに包まれる不思議な時を過ごしました。ここには、聖徳太子が臣下の秦河勝に授けたとされる国宝第1号の弥勒菩薩半跏思惟像（教科書で覚えた記憶があります）をはじめ、館内の至る所に仏像が配置され、中央には畳が敷かれており、仏像の正面で正座して対面することもできます。どの仏像も静かな迫力を帯びて鎮座されていますが、私が特に見入ってしまったのは、入り口で館内全ての仏像を



守るように佇んでいる一番大きな「千手観音菩薩立像」です。彼は火事で片手を焼失しながらも、仲間を守っているかのようであり、遠い過去から現在、そして未来永劫、皆を守り続ける力強さと優しさに満ち溢れた仏像でした。

広隆寺の次に車折神社へ向かいました。ここは最近パワースポットとして注目されている神社です。境内には天宇受売命を祀る芸能神社があり、多くの芸能人がお忍びで訪れるということで、芸能人の名前が書かれた整然と並ぶ朱色の玉垣を見るのも楽しいです。本殿では「願い事が一つ叶う」というご利益にあやかって、私も一つ願掛けをしました。お守りを授与していただき、大切にしています。



太秦から散策してきた私たちは、最後に嵐山の天龍寺を訪れました。足利尊氏が創立した臨済宗のお寺で、京都五山の一つです。折しも晩秋の庭園は絵のように美しく、鮮やかな銀杏や紅葉にしばし目を奪われました。今回の京都訪問で楽しみにしていたのが、法堂の天井に大きく描かれた特別公開中の雲竜図でしたが、到着したのが受付終了のわずか5分後で、残念ながら見る事が叶いませんでした。龍は、私たちの訪れの前に、天に昇って行ってしまったのかも知れません……。

（学生編集員：青名麻梨亜）

仏教のことば

四諦

釈尊が悟りを開き、人々に説いた根本の教えに「四諦」があります。「諦」とは、「諦める」とも読み慣らわされますが、これは悟りによって明らかにされた真理（道理）を指します。つまり「四諦」とは、仏によって説かれた「四つの真理」という意味です。その四つの真理には、苦諦、集諦、滅諦、道諦があげられます。

苦諦とは、人生は苦悩に満ちているという道理です。仏教では、我々

の輪廻存在そのものを、苦しみであると捉えます。次に集諦ですが、これはそういった苦しみの原因は執着によって起こり、結局はその執着は煩惱が集まって起こるという道理です。さらに滅諦は、それら煩惱が消滅すれば、すべての苦悩は無くなるという道理です。煩惱が無くなれば、執着が無くなるので、その結果として苦悩が消滅することです。最後に道諦ですが、これは煩惱を減するための道理であり、方法論としての実践修行です。具体的には瞑想の実践ですが、瞑想の実践によって苦悩の原因である執着の心を離れ、煩惱を減した智慧の心が究極的に完成されるということです。

このように、我々が苦悩に満ちた輪廻の世界から解脱して、安らかな涅槃の境地に到達することが、仏教での根本的な目標であるとされますが、これらを説いたものが「四諦」なのです。（藤谷厚生）

編集後記

「UPAYA」と本学初年次必修授業「仏教Ⅰ・Ⅱ」は一体だ。学園訓についても、昨年度の大学・短大周年記念を機に両者で取り上げてきた。それも、今号の上級先生による「誠実」のご解説により、残りは「健康」に関する一項のみとなった。

山田先生は世界的視座から、南谷先生は笑いというふるまいを通して、「誠実」について説かれた。男女共学一学期生として卒業された職員の方から、聖徳太子ゆかりの地について丁寧なレポートを寄せた学生編集員へと、学園訓の「誠実」は脈々と受け継がれている。「誠実」は、藤谷先生の説かれた四諦の真理への第一歩だ。心に刻みたい。（K.M）

研究所員紹介

所長	岩尾 洋（学長・教授）
主任研究員	藤谷 厚生（教授）
研究員	石田 陽子（教授）
	上瀬 宏道（教授）
	源 健一郎（准教授）
	南谷 美保（教授）
	矢羽野 隆男（教授）
	杉中 康平（教授）
	奥羽 充規（准教授）
	坂本 光徳（専任講師）
	中田 貴真（専任講師）
	南谷 恵敏（客員教授）
	桃尾 幸順

UPAYA（ウパーヤ）14号

ウパーヤとは「高い目標へ到達すること」を意味し、漢訳では「方便」となります。

平成31年4月1日発行

発行 四天王寺大学

仏教文化研究所 仏教教育センター

所在地 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1

TEL:072-956-3181(代) FAX:072-956-0611

URL:<http://www.shitennoji.ac.jp/>

「UPAYA（ウパーヤ）」に関する
ご意見やご感想はこちらへお寄せください。
E-mail bukken@shitennoji.ac.jp
(件名は「ウパーヤ」としてください)

